

志筑忠雄「阿羅祭亜来歴」の訳出とその書誌

大島, 明秀
熊本県立大学文学部 : 准教授 : 歴史学

<https://hdl.handle.net/2324/1449085>

出版情報 : 雅俗. 12, pp.33-47, 2013-07. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



雅

俗

第十二号

平成二十五年七月

志筑忠雄「阿羅祭並来歴」の訳出とその書誌

大島 明秀

志筑忠雄「阿羅祭亜来歴」の訳出とその書誌

大島 明秀

はじめに

明治二八年（一八九五）六月、狩野亨吉（一八六五—一九四二）は「我邦人ノ理学ノ思想ニ乏シ⁽¹⁾」いことを憂い、理学啓蒙のために創刊された『東洋学芸雑誌』の第一六五号紙上で、それまで世に忘れ去られていた近世後期長崎の学者志筑忠雄（別名中野柳圃、一七六〇—一八〇六）を取り上げ、その独自の宇宙論「混沌分判図説」が、カント、ラプラス（Immanuel Kant, 1724-1804 ; Pierre-Simon, marquis de Laplace, 1749-1827）による太陽系成因に関する星雲説に類似していることを論じ、これを賞賛した⁽²⁾。爾後、志筑忠雄には日本科学史上の「天才」という評価が定着していく。

しかしながら、目下、志筑忠雄の背景や人物像に迫るための資料は乏しく⁽³⁾、主となるのは写本で伝えられる著作である。五十点前後確認できる業績はおよそ次の三種に分類できる。すなわち、（一）天文・物理学、（二）オランダ語・文法学、（三）地理誌・海外事情である⁽⁴⁾。まず天文・物理学の側面については、大森実や吉田忠によって精力的に研究が進められ、先に述べた宇宙論の「獨創性」や、ニュートン物理学を「先駆的」に導入した実績などが高く評価されてきた⁽⁵⁾。

語学分野においても、長年にわたり精力的に資料収集と紹介が行われてきた⁽⁶⁾。蓄積された成果から、特に品詞概念の理解の面で、志筑忠雄が日本におけるオランダ語・文法学を向上させたことが指摘されている⁽⁷⁾。

残る地理誌・海外事情に係る仕事については、とりわけ「鎖国」という言葉を創出したことが周知されているものの、前二者と比較するとこの分野の研究史が薄い感はある⁽⁸⁾。

志筑には、様々な蘭書や漢訳地理・地誌書に基づいて知りえた事柄を雑多に収録した「万国管闕」（一七八二序）のような著作が確認できるが⁽⁹⁾、「阿羅祭亜来歴^{（おろしやらいれき）}」（一七九五成）、「鎖国論」（一八〇一成）、「二国会盟録」（一八〇六成）といった、ロシアの南下を意識して編まれた極めて〈政治的〉な仕事もある⁽¹⁰⁾。

このうち、ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）著書からその日本の対外関係に係る論文を訳出した「鎖国論」ならびに二十巻にわたるプレヴォー（Antoine François Prevost d'Exiles, 1697-1763）の大部の旅行記シリーズから、清とロシアの国境を画定したネルチンスク（Nerchinsk）条約締結（一六八九）の経緯に係る一節を訳出した「二国会盟録」については近年の研究で新たな展開が見られたものの⁽¹¹⁾、

上記三部作の端緒と位置づけられる「阿羅祭亜来歴」については、ほぼ手付かずのまま未開拓の領域として残されている。

ここで、先行研究の多くに重大な方法論的問題が所在することも付言しておきたい。志筑忠雄研究においては写本著作が主たる対象となる以上、その資料的問題——転写によつて記述が絶えず原本から遠ざかり、各写本で構成や記述が一定しない現象——は避けられず、したがって、或る著作を論じるにあたっては現存資料を徹底的に収集分析した上で、善本を選出したり、校訂したりといった作業が必要となる。しかしながら、少数の例外を除いて、従来はかかる問題に自覚的ではなく、文献学的手法に基づいてこなかった。

以上を踏まえて、本稿では志筑忠雄の〈政治的〉著作の嚆矢と見られる「阿羅祭亜来歴」を中心的題材として、蘭書原典とその訳出箇所を同定し、和訳時の改変を明らかにする。加えて、書誌学的方法により現存写本を分析し、資料の系統化を行う。

この仕事を通して「阿羅祭亜来歴」の資料的位置づけを定め、また、そこから垣間見える志筑忠雄の姿を描出したい。

一、現存写本六点の概要

調査により各地に六本の「阿羅祭亜来歴」写本が伝存していることが判明した。以下、諸本の書誌を、法量、形態、紙数、書体、外題、内題、志筑忠雄跋文の年記・署名¹⁾、大槻玄沢跋文の年記・署名、蔵書印記、貼紙、備考の順に記載した。その際、国立公文書館蔵本と早稲田大学蔵本では別作品の一部として所収されているため、これを収

めた作品の題名を内題とし、冊子全体の表題を外題として採録した。なお、引用部分は底本の表記をできるだけ反映させた。また、現所蔵機関の蔵書印は採録せず、配列は所蔵機関名の五十音順とした。

1、国立公文書館（内閣文庫）

法量…二七・二×一八・一厘

形態…写本、一冊

紙数…一八丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…東砂葛記（題箋、墨書）

内題…東砂葛記

（志筑）跋文の年記・署名…癸亥十月 通詞志筑忠次郎譯

大槻跋文の年記・署名…なし

蔵書印記…「編脩地志備用典籍」（朱・陽）

…「秘閣圖書之章」（朱・陽）

貼紙…「土」（表紙、墨書）

…「原〇三百六十二函」（表紙、朱書、「〇」のみ墨書）

備考…題箋に書かれた外題に続いて、表紙に直接「全」と墨書打付されている

…前野良沢「東砂葛記」（一七九一成）の一部として所収（「羅祭亜来歴²⁾」は一丁表、一七丁裏）

…「編脩地志備用典籍」は昌平坂学問所の印

…年記・署名は無いものの、書誌6と同じ「羅祭亜来歴³⁾」に対する古賀侗庵の奥書あり

「秘閣圖書之章」は紅葉山文庫旧蔵本、若しくは明治新収本であることを示している

2、洲本市立洲本図書館

法量…二二・二×一六・八糎

形態…写本、一冊

紙数…九丁

表記…漢字平仮名交じり文

外題…阿羅祭亞來歴（朱書打付）

内題…阿羅祭亞來歴 阿羅祭亞ハ莫斯科比亜ナリ

志筑跋文の年記・署名…寛政七卯二月日 志筑忠雄譯

大槻跋文の年記・署名…癸丑十月録

蔵書印記…「柴氏家藏圖書」（朱・陽）

…「柴邦彦圖書後歸阿波國文庫別藏于江戸雀林莊之萬卷樓」

（朱・陽）

貼紙…「心」（表紙、墨書）

備考…蔵書印者は、寛政の三博士として周知される朱子学者柴野栗

山（一七三六）一八〇七）

…癸丑は寛政五年（一七九三）

3、静嘉堂文庫

法量…二五・八×一七・九糎

形態…写本、一冊

紙数…三七丁

表記…漢字平仮名交じり文

外題…魯西魯使重志
北京附録紀行（題箋、墨書）

内題…魯西亜志附録

志筑跋文の年記・署名…寛政七卯二月日 志筑忠雄譯

大槻跋文の年記・署名…癸丑十月録

蔵書印記…「大槻文庫」（朱・陽）

…「梅陰書屋」（朱・陽）

貼紙…なし

備考…吉雄幸作「魯使北京紀行」（一七七八成）と合綴（魯西亜志

附録）は二丁表より一四丁裏）

…「大槻文庫」は、仙台藩校養賢堂で学頭を務めた漢学者大槻磐

溪（一八〇一）一八七八）の印

…「梅陰書屋」は、朱子学者大黒梅陰（一七九七）一八五二）の

印。ロシア漂流で著名な大黒屋光太夫（一七五一）一八二八）

の息子

…内題の後、改行して「阿羅祭亞來歴 阿羅祭亞ハ莫斯科比亜ナリ」と

あり

4、山口県文書館（徳山毛利家文庫）

法量…二九・〇×二〇・五糎

形態…写本、一冊

表記…一四丁

書体…漢字平仮名交じり文

外題…魯西亜志 附録（墨書打付）

内題…魯西亜志 附録

志筑跋文の年記・署名…寛政七卯二月日 志筑忠雄譯

大槻跋文の年記・署名…癸丑十月録

藏書印記…なし

貼紙…なし

備考…明らかに近代以降に後付されたと考えられる表紙、裏表紙な

らびに遊紙二枚は除いて書誌を記した

…内題の後、改行して「阿羅祭亜來歴^{阿羅祭亜ハモスコヒヤナリ}」とあり

5、横浜市立大学学術情報センター（鮎澤文庫）

法量…二五・四×一八・二糶

形態…写本、一冊

紙数…六丁

表記…漢字平仮名交じり文

外題…魯西亜志^{附録}（墨書打付）

内題…魯西亜附録

志筑跋文の年記・署名…寛政七卯二月日 志筑忠雄譯

大槻跋文の年記・署名…癸丑十月録

藏書印記…「鮎澤信太郎藏書」（朱・陽）

貼紙…なし

備考…藏書印者は、横浜市立大学教授などを務めた地理学者鮎澤信

太郎（一九〇八—一九六四）

…内題の後、改行して「阿羅祭亜來歴^{阿羅祭亜ハモスコヒヤナリ}」と

あり

6、早稲田大学図書館

法量…二〇・〇×一二・七糶

形態…写本、一冊

紙数…八八丁

表記…漢字カタカナ交じり文

外題…俄羅斯紀聞（墨書打付）

内題…東砂葛記

（志筑）跋文の年記・署名…癸亥十月 通詞志筑忠次郎譯

大槻跋文の年記・署名…なし

藏書印記…「川田氏藏書」（朱・陰）

貼紙…なし

備考…本書は古賀侗庵「俄羅斯紀聞」第一集第九冊

…本冊には「泰西圖説」卷之十二、「漂流紀事」、「幸大夫口語筆

受被」、「北槎畧聞」、「東砂葛記」、「加模西葛杜加國風説^考

の六作品が収録されており、その中の「東砂葛記」の一部と

して「阿羅祭亜來歴」に相当する部分が確認できる（「羅祭亜

來歴^{莫斯科比亜ナリ}」は六六丁裏—七二丁表）

…「東砂葛記」には、「羅祭亜來歴^{莫斯科比亜ナリ}」に対する古賀侗庵の奥

書とその年記・署名「文化壬申冬十一月冬至寫完 侗庵支離

子識」あり

…「俄羅斯紀聞」第一集第九冊には「泰西圖説」卷之十二、「漂

流紀事」、「幸大夫口語筆受被」、「北槎畧聞^{（底本マダ）}」、「東砂葛記」、「加

横西葛杜加國風説考」の六作品が収録されており、その中の「東砂葛記」の一部として「阿羅祭亜来歴」に相当する部分が確認できる（「羅祭亜来歴」^{莫斯哥比亜ナリ}）は六六丁裏一七二丁表）
蔵書印者は東京帝国大学教授などを務めた漢学者川田甕江（剛）

以上、六丁の書誌について簡略に述べたが、静嘉堂本のように他資料と合綴したもの、若しくは国立公文書館本や早大本のように他資料の一部となっている形態も確認できた。なお、日本古典籍総合目録データベースに確認できる礪川文庫旧蔵「魯西亜人止白里併有来歴」は、「阿羅祭亜来歴」と同資料と思われるが、戦災により亡失した。

また、資料題名には「阿羅祭亜来歴」、「羅祭亜来歴」、「魯西亜志附録」、「魯西亜附録」との四種が認められ、加えて、志筑忠雄跋文とその年記・署名「寛政七卯二月日 志筑忠雄譯」ならびに大槻玄沢跋文とその年記「癸丑十月録」を両有する資料系統と、一つの跋文とその年記・署名「癸亥十月 通詞志筑忠次郎譯」しか持たない系統が存在することも明らかになった。

二、「阿羅祭亜来歴」の典拠と訳出時の改変

これまでに「阿羅祭亜来歴」は、五卷から成る二つ折判 (folio) フォルテン『新旧東インド誌』(François Valentyn [1656-1727]: *Oud en nieuw Oost-Indiën. Te Dordrecht: By Joannes van Braam; Te Amsterdam: By Gerard onder de Linden, 1724-26.*) の一部を抄訳したものである。

とは指摘されてきたものの、正確な訳出箇所は示されてこなかった¹³⁾。

さて、典拠の同定にあたっては、まず底本とする善本の選出、若しくは諸本の校訂版の作成が必要となる。まず、蘭書原典については、翻訳時の志筑手沢本は不明ながら¹⁴⁾、十八世紀中に『新旧東インド誌』の重版は刊行されていないため、初版を用いて訳出したものと見てよい¹⁵⁾。次に、「阿羅祭亜来歴」の諸写本を確認したところ、本文の文章や文脈は基本的に一致していることが判明した。したがってどの本を用いても特段の差し支えはないが、諸本を詳細に検討した結果、洲本市立洲本図書館本を底本としながら早稲田大学図書館本を用いて確認することとした（理由については第三章を参照）。

『新旧東インド誌』を精査したところ、志筑忠雄が訳出した箇所は、第一巻の第二編第三章 (Tweede Boek, Derde Hoofdstuk) のうちの、一三頁の左段下方、欄外注 (marginalia) に「北方に東インドへの新しい道が、陸路で発見される」(Een nieuwe weg naar Oostindien in 't Noorden, te land, ondeckt.) と記されたところから一五頁の冒頭まで、計十八にわたる段落であることが判明した。該当部分は、一五九六または九七年から一七二二年にかけて、年次を追ってロシアが東方に進出した来歴を描いたくだりであり、途中、シベリアを併有した経緯や、ロシアと清朝が国境を画定したことで周知されるネルチンスクでの会談の経過も記されている。

志筑は注を付しながら原文に即して丁寧な訳しているものの、時折要約している部分や、意図的な脱落が見られる。例えば、ロシア皇帝テオドールが没した一節では、「阿羅祭亜来歴」では原文に見られる正

確な日付は落ちている⁽¹⁶⁾。また、中国人とロシア人が領土をめぐつてぶつかる一節では、原文では皇帝イワンとピョートルの名前も挙げられているが⁽¹⁷⁾、「阿羅祭亜来歴」では内容を要約した上で、単に「莫斯未垂人」と改められている。

ただし、本文の終結部分の、皇帝ピョートルがペルシャに遠征しながらも清にも目配りして遣使を送ったくだりでは、正確な日付（一七二二年二月二五日）はやはり脱落しているものの⁽¹⁸⁾、一方で志筑は前に避けたピョートルの名前を訳出している⁽¹⁹⁾。原文には様々なロシア皇帝の名前が何度も登場することから、おそらく志筑は文脈に特に必要無いと判断した場合に訳出を避けたものと推察される。

いずれにせよ、かかる一連の営為から、志筑忠雄が詳細な日付にまでこだわらなかったことや、文脈によってロシア皇帝名の訳出を意図的に行わなかった箇所があることが分かる。

志筑の改変はこれにとどまらず、明らかにキリスト教に関わる記述を回避している様子が窺える。まず、一六八九年七月三一日にネルチンスク⁽²⁰⁾で行われたロシアと清の会談をめぐるくだりでは、*des Jesuiten*（これらのイエズス会士たち）という語を含んだ従属節の訳が脱落している⁽²¹⁾。その直後に続いて出てくる *De velds Jesuiten*（イエズス会神父たち）については、「通事二人⁽²²⁾」と原文から離れた内容に改変されている⁽²³⁾。

志筑は、後年著す「鎖国論」（一八〇一成）でもキリスト教関連の記述に対し、その色を薄める仕掛けを施している。ただし、それに加えて「鎖国論」の本文や志筑注には、時折自身の価値基準（植民地活動やキリスト教に対する反感・嫌悪）から発せられた改変や発言が認め

られるものの⁽²⁴⁾、「阿羅祭亜来歴」（一七九五成）の段階ではかかる営為は確認できない。

三、書誌系統の分類と原題

第一章で見てきた六点の書誌は、資料形態、題名、構成、注、跋文、奥書等といった点において異同が確認できた。以下、これらを手掛かりとしながら写本六点の系統を分析し、その後題名の問題について検討する。

（一）志筑忠雄および大槻玄沢の二跋文を有する系統

この系統に属する写本は、洲本図書館蔵本（書誌2）、静嘉堂文庫蔵本（書誌3）、山口県文書館蔵本（書誌4）、横浜市立大学蔵本（書誌5）の四点である。

いずれも漢字平仮名混じり文（外国の固有名詞のみカタカナ）で表記され、①本文、②志筑忠雄跋文、③志筑跋文の年記・署名（「寛政七卯」「一七九五」）二月日 志筑忠雄譯）、④大槻玄沢跋文、⑤大槻跋文の年記・署名（「癸丑」「一七九三」十月録）の順に構成されている。この四点の写本は、寛政七年（一七九五）志筑忠雄の訳出写本に遡る資料と位置づけることができる。

本系統における諸本の異同は、まず、題名に認められる。洲本本は「阿羅祭亜来歴」（外題・内題）、静嘉堂本ならびに山口県文書館本は「魯西亞志附録」（外題・内題）、横市大本では外題が「魯西亞志附録」、内題が「魯西亞附録」と記されている。ただし、「魯西亞（志）附録」

と題された三点の写本は、いずれも内題の直後に「阿羅祭亜来歴」と記され、本文が始まる。

表1 各写本の題名

書誌番号	内題（書誌1、6は作品内における題名）	外題
1 国立公文書館本	羅祭亜来歴（東砂葛記）の一部として所収	「なし」
2 洲本本	阿羅祭亜来歴	阿羅祭亜来歴
3 静嘉堂本	魯西亞志附録	魯西亞志附録
4 山口県文書館本	魯西亞志附録	魯西亞志附録
5 横市大本	魯西亞志附録	魯西亞志附録
6 早大本	羅祭亜来歴（東砂葛記）の一部として所収	「なし」

次に、資料形態の点で大きく異なるのは静嘉堂本である。唯一、阿蘭陀通詞吉雄耕牛（一七二四―一八〇〇）の著述「魯使北京紀行」と合綴されている。

また、書式にも大きな異同が確認できる。洲本本では割注になっている記述が、その他三点の資料では一字程度字頭を落とした形で本文に組み込まれている。なお、後述第二節で扱う一跋文系統では、洲本本と同様に割注で記されている。

ここで、本系統に属する各写本の「阿羅祭亜来歴」原本からの距離を測定するため、外国の固有名詞に対する表記を見てみよう。例えば、洲本本の志筑忠雄跋文では、原著者名 François Valentyn を「フランソイスハレンティン」と正確な読みを表記できている。一方で、徳山藩旧蔵の山口県文書館本では「フランソイスハレンティン^{（25）}グ」とあり、また、朱子学者大黒梅陰（一七九七―一八五二）や漢学者大槻磐溪（一八〇一―一八七八）が旧蔵していた静嘉堂本では「フランソ

イスハレンティン^{（26）}グ」と下線部分がそれぞれ誤っている。加えて、山口県文書館本では、オランダ語におけるロシアの呼び方について、他写本では「リユス」とあるところが「リユル」と表記されている。

続いて、大槻玄沢跋文で、ロシアの地誌は「ヒプ子ル」ガ地誌「ゼヤガラヒイ」ニ詳なり（洲本本）と言及されている箇所がある。「ヒプ子ル」とはドイツの地理学者 Johann Hübner (1668-1731) の *Hippur*、ここでは正確な読みを反映できている。ところが、地理学者鮎澤信太郎（一九〇八―一九六四）が所有していた横市大本では「ヒプ子ルレ」ガ地誌「セラカラヒイに詳なり」と、固有名詞に付された鉤括弧が取れるばかりか、原著者名も誤っている。

加えて、文章の異同も確認できる。一例を挙げると、「阿羅祭亜来歴」冒頭部分のシベリアの獵師とロシア商人の交易の様子を描いたくだりで、洲本本や後述第二節で扱う一跋文系統では、商人が貂（*Eur. m.*）の皮に魅力を感じた理由について「其美なるを見て」と、原文に即した訳文であるのに対し、静嘉堂本、山口県文書館本、ならびに横市大本では「其皮の珍らしく美なる事を見て」と、文意を損なわない範囲ではあるが、原文に不在の記述が加筆され文章が冗長になっている^{（26）}。静嘉堂本、山口県文書館本、ならびに横市大本では、これと同様の増補が本文を通して至る所に見られ、その増補文は三写本で一致する。

さらに、洲本本の本文末尾近くの文章で「商賈ハ水路【水路ハ支那の西邊より北馬海に流れ下る也】の志あるによりて^{（27）}」とあり、第二節で扱う一跋文系統でもこの部分の脱落は認められないが、山口県文書館本では「商^{（空白）}□□水路ハ支那の西邊より北高海に流れ下る也^{（空白）}」の

志あるによりて」と一部脱落している。静嘉堂本および横市大本にも全く同じ脱落が確認でき、これらのことから、洲本本を除く三写本は、訳文に増補を有し、かつこの部分の脱落を有した系統の底本をもとに写されたものであることが分かる。

また、内題もしくは内題の次行に記された「阿羅祭亜来歴」の下には注があり、洲本本ならびに静嘉堂本では「阿羅祭亜ハ莫斯科比亞ナリ」とある。それは第二節で扱った一跋文系統でも同様である。一方、山口県文書館本および横市大本では「阿羅祭亜ハモスコヒヤナリ」と後半がカタカナに開かれ、両資料の距離の近さが確認できる。中でも横市大本は、「千七百十九年【康熙五十八年】春月一人の武将を遣し【洲本本】という文章を唯一脱落していることから、四点の中で最も「阿羅祭亜来歴」原本から距離が遠い資料と考えられる。

以上から、洲本本が最も「阿羅祭亜来歴」原本に距離が近い資料と判断できるが、洲本本の伝来はそのことをさらに裏付けている。洲本本に認められる二種の印記「柴氏家藏圖書」、「柴邦彦圖書後歸阿波國文庫別藏于江戸雀林莊之萬巻樓」は、老中松平定信（一七五八―一八二九）が登用したことで周知される朱子学者柴野栗山（一七三六―一八〇七）の印形である。栗山は幕府の外交政策にも参与しており、文化元年（一八〇四）にロシア使節レザノフ（Nikolai Petrovich Rezanov, 1764-1807）が通商を求めて来航した際、対応方針について幕府から諮問を受けた大学頭林述斎（一七六八―一八四一）は、栗山と連名で回答（上書）を作成・提出している⁽²⁸⁾。かかる栗山が旧蔵した洲本本は、その没年を踏まえると、一八〇七年以前に転写されたものと言える。



図3 「柴邦彦圖書後歸阿波國文庫別藏于江戸雀林莊之萬巻樓」印

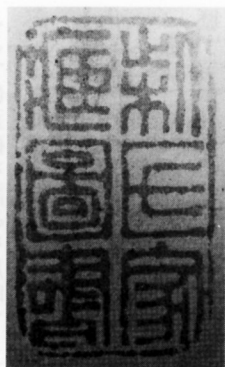


図2 「柴氏家藏圖書」印

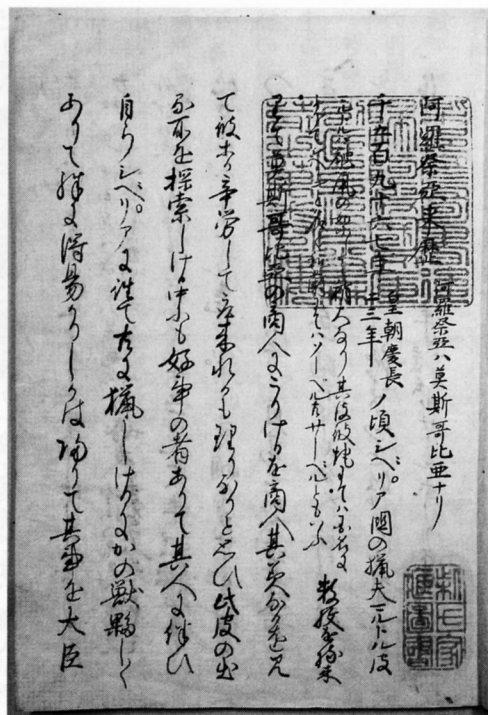


図1 洲本市立洲本図書館本の内題

ただし、洲本本にも誤りは見られ、先に挙げた引用文に登場した「北馬海」とは「北高海⁽²⁹⁾」のことで、「馬」と「高」の草書が似ていることから誤ったものと考えられる⁽³⁰⁾。

その他、一六八八年という記述に対し、割注で「清康熙二十五年」(正しくは二七年)という誤った情報を付している⁽³¹⁾。また、人

物で「ソイサン公」⁽³²⁾とあるべきところが「ソイサンハム」と誤解されていることは、『新田東インド誌』原本を読んだ人物ならばありえない。これらの点で、洲本本は「阿羅祭亜来歴」原本からやや遠ざかったものとなっていることが推察される。

しかしいずれにせよ、「阿羅祭亜来歴」原本に最も近い写本は洲本本で、次に静嘉堂本、そして山口県文書館本、横市大本の順に原本との距離を位置づけることができる。

(二) 跋文のみ有する系統

この系統に属する写本は、早稲田大学蔵本（書誌6）と国立公文書館（内閣文庫）蔵本⁽³³⁾（書誌1）の二点である。

まず、早大本であるが、これは昌平坂学問所で教鞭を執ったことで周知され、海防問題にも精力的に取り組んだ儒学者古賀侗庵（一七八八―一八四七）が編集した大部のシリーズ「俄羅斯紀聞」第一集（一八〇九―一八一三）の第九冊に収められている。本編は侗庵の自筆写本であり、東北アジアで唯一の脅威と認識していたロシア関係の歴史地理書の抜書を、侗庵が収集編集したものである⁽³⁴⁾。奥書の年記・署名「文化壬申冬十一月冬至寫完 侗庵支離子識」から、当該部分が写されたのは、一八一二年一月であることが分かる。

国立公文書館本も含めて本系統の特徴的な点としては、第一に、両者ともに「阿」が脱落して「羅祭亜来歴」と題されていることである。

第二に、この「羅祭亜来歴」が「東砂葛記」という作品を構成する一部分となっていることが挙げられる。「東砂葛記」は蘭学者⁽³⁵⁾前野良沢（一七二三―一八〇三）の著述であり、そもそも「（阿）羅祭亜来

歴」が所収されて成立している作品ではない⁽³⁶⁾。

第三に、表記が漢字カタカナ混じり文であること。

第四に、本文で、ネルチンスク条約で画定された境界を、北京の西北に当たる北緯四八度（一説には五五度）の地であると述べた箇所に、里程と緯度の関係を緻密に計算して四八度が正しいとする長文の注が付されている。前節で論じた二跋文系統には不在であることから、当該注は「阿羅祭亜来歴」原本には無く、後付されたものと考えてよい。

第五に、前節で論じた二跋文系統と比較すると、構成上の大きな異同が見られる。他系統写本の基本的な構成は、①本文、②志筑忠雄跋文、③跋文の年記・署名（寛政七卯二月日 志筑忠雄譯）、④大槻玄沢跋文、⑤跋文の年記（癸丑十月録）であるが、本系統では①本文、②志筑・大槻庄縮跋文、③跋文の年記・署名（癸亥十月 通詞志筑忠次郎譯）、④「下原氏」で始まる古賀侗庵奥書、⑤奥書の年記・署名、早大本のみ）となっている。

二跋文系統では、本文末尾に志筑忠雄による跋文とその年記・署名が確認でき、その後「茂質按るに」で始まる蘭学者大槻玄沢（一七五七―一八二七）の跋文とその年記が付されているが、本系統ではそれらを一つに改訂庄縮した跋文が付され、さらに年記・署名も一つになり、その年次も「癸亥」「一八〇三」十月 通詞志筑忠次郎譯」とされている。

ここで通詞としての志筑忠雄の経歴を検討すると、少なくとも天明二年（一七八二）まで稽古通詞を務めていたことが確認されており⁽³⁷⁾、最長でも天明六年（一七八六）五月までの可能性がある⁽³⁸⁾。つまり、一八〇三年の時点で志筑忠雄は「通詞」では無い。したがって、

この年記・署名は志筑ではない他者による後付であることは明らかである。よつて年記の信憑性も疑われる。いずれにせよ、二つの跋文が存在している系統と、それを一つに圧縮している系統の位置関係を検討すると、前者がより「阿羅祭亜来歴」原本に近いものであることは疑い無いところであろう。

第六に、先述したように、本系統のみ有する「下原氏」で始まる侗庵の奥書がある。以下、早大本から引用する。

下原氏ノ如クナレハ魯西亜ノ本國ノ濫觴ノ来歴ノヨウニ聞ユルナレトモ「」本編ノ翻譯スル所ハ慶長三年以來韃靼ノシヘリア東方ノ地方ヲ侵掠セシ来歴ナリ⁽³⁹⁾

ここに登場する「下原氏」とは誰か、という問題が生じるが、他系統の大槻玄沢跋文の冒頭と比較することでその解答が得られる。

茂質按ニ此題名魯西亜人止白里併有歴ナド、改ヘシ「」原名ノ如ナレハ魯西亜本地の濫觴来歴の様に聞ゆる也⁽⁴⁰⁾

つまり、もともと「」し原名のことくなれハ」とあつた文言を転写する際「下原氏ノ如クナレハ」と誤写したのである。逆に、他系統が「下原氏」を「原名」と誤写した可能性については、跋文の内容から言つてまず考えられない。

さて、国立公文書館本であるが、「阿羅祭亜来歴」が「東砂葛記」の一部になっている点、「阿」が脱落して「羅祭亜来歴」と題されている点、或いは漢字カタカナ混じり文で表記されている点において早大本と一致している。さらには、跋文やその年記・署名などの構成と文言、本文中の表現、誤字脱字に至るまでほぼ早大本と重なる。問題は、どちらが先に成立したのかである。

早大本では朱で圈点や注が付されていたり、外国の固有名詞に朱線が引かれているのに対し、国立公文書館本にはこれらは見られず、さらに侗庵奥書の年記・署名も不在である。また、粗雑に記された侗庵自筆本と異なり、国立公文書館本は清書され、要所で改丁もされている。

ところで、「編脩地志備用典籍」印が押印されていることから、国立公文書館本は、幕府が全国的な地誌編集を行うため、文化七年（一八一〇）に昌平坂学問所の中に史局を設けて収集した資料の一つであった可能性が浮上した⁽⁴¹⁾。そこで、文政六年（一八二三）序を有する「編脩地志備用典籍解題」を確認すると、次のように「東砂葛記」について言及が確認できた。

また次に羅祭亜の来歴を記せしものあり、此記は和蘭人フランソイスハレンラインといへるもの著す所の印度志のうち、粗記せしを抜取て訳を施すものにして、魯西亜志と照しみるへし、末に、印度志は享保九年に成就せりと記し、大槻玄沢兄追趣とあり、また巻最尾に癸亥十月通詞志筑忠次郎訳としるし、其文に、下原氏の如くなれば、魯西亜本國濫觴の来歴のやうに聞ゆれとも、本編の翻訳する所は慶長三年以來韃靼のシベリア東方の地方を侵掠せし来歴なりといへり⁽⁴²⁾

年記・署名の文言や、「下原氏の如くなれば」という文言からも、この解題が指し示す典籍が国立公文書館本であることは間違いない。また、「編脩地志備用典籍解題」の凡例には「此編は文化年中収入の書にかきりて、その後収入せしものあるも、みな続編に譲れり⁽⁴³⁾」とあり、つまりこの写本は、幕府の地誌編纂のために少なくとも一八一〇年以

降、一八一八年以前に写された資料であつた。

侗庵自筆本は一八一二年に筆写されており、成立年次のみでは国立公文書館本との前後関係を裏付けることはできないが、ただ、ここまでに言及した侗庵「俄羅斯紀聞」や「編脩地志備用典籍」の性格、或いは早大本と国立公文書館本の異同、さらには侗庵が文化六年（一八〇九）から弘化四年（一八四七）に没するまで儒者として昌平坂学問所に務めていた⁽⁴⁾ことなどを勘案すると、編脩地志備用典籍本（国立公文書館本）は、侗庵自筆本（早大本）をもとに転写したものと見てよいだろう。

資料形態、表記や跋文の改変、ならびに後付の注などが見られる点で、本系統より二跋文系統（とりわけ洲本本）の方が「阿羅祭亜来歴」原本と近い距離にあると考えられるが、一部ではあるが、一跋文系統の方がより原本に近い部分もあることを付言しておきたい。具体的には、本文末尾でロシアの通貨単位ルーブルについて触れる記述が確認できるが、そこに付されている注に着目したい。本系統の注では「リユベルは莫斯科未亜の銀銭の数也」「和蘭何程ト云フ當事在館ノカビタンモ知ラズ」（早大本）と、ルーブルがロシアの通貨であること以外は不明とされている。

ところが、洲本本を含む二跋文系統の四写本いずれも「リユベルは莫斯科未亜国の銀銭の類也」「ネストロイスといふ者の書の中にピュトレルといふ者の言ふ一ルウベル也」「各五ギュルトせり」「五ギュルドハ文銀ニて大概四匁也」「然ハールウベルハ廿匁也」（洲本本）と、オランダの旅行研究家ストロイス（Jan Jansen Struys, 1630-1694）の名を挙げ、それに加えてオランダおよび日本通貨の交換比率

を説明している。

ここに言及されている「ストロイス」とはその著書『三大旅行記』（Drie aanmerkelyke Reizen）を指し、志筑忠雄は後年に訳出した「鎖国論」（一八〇一成）の注で本書を引いているが⁽⁴⁵⁾、「阿羅祭亜来歴」訳出の時点でこれを参照することができたかどうかは定かではない。

また、「鎖国論」訳出時の手沢本と目される楽歳堂文庫旧蔵『三大旅行記』第三版⁽⁴⁶⁾中のロシアへ旅行したくだりでは、確かに隊長ブトレル（Butler⁽⁴⁷⁾）の名やルーブル（Roebel⁽⁴⁸⁾）という語は登場するが、このルーブルには何の説明も施されていない。つまり、『三大旅行記』だけではルーブルとオランダ通貨との交換比率を知ることではできない。



図4 楽歳堂文庫旧蔵『三大旅行記』第三版の扉（松浦史料博物館蔵）

したがって、二跋文系統の当該注は、後から別の知識を用いて加筆されたものであることは間違いなく、この点においては、本節で対象とした一跋文系統の方が、「阿羅祭亜来歴」原本の姿を留めていると見てよいだろう。

最後に本節をまとめると、一八一二年に筆写された古賀侗庵本（早大本）は、資料形態、表記や跋文の改変、ならびに後付の注などが見られる点で原本から離れたものとなっているが、本文文章や内容はほぼ洲本本と異ならず、「阿羅祭亜来歴」原本に或る程度距離の近い写本と目される。また、ロシアの通貨ルーブルをめぐる注に関しては、より原型に近いものと考えられる。その侗庵本を底本として、一八一〇年から一八一八年の間に編脩地志備用典籍本（国立公文書館本）が作成されたと見られる。

（二）写本の原題

文字の脱落到泥せず資料名を大別すると、現存写本には「阿羅祭亜来歴」と「魯西亞志附録」の二種類が存在する。ただし、いずれの写本にせよ、「阿羅祭亜来歴」という文言が全ての写本に確認できるところから、原題は「阿羅祭亜来歴」であつたと目される。このことをさらに裏付ける資料として、先に引いた大槻玄沢跋文の冒頭部分を検討したい。

茂質按ニ此題名魯西亞人止白里併有歴ナド、改へし「」原名ノ如なれハ魯西亞本地の濫觴来歴の様に聞ゆる也⁽⁴⁹⁾

玄沢は志筑忠雄が親交を持っていた数少ない人物の一人であつたが⁽⁵⁰⁾、ここで述べている内容は、「阿羅祭亜来歴」という原題名では、

読者がロシア本土の濫觴来歴についての書物と誤解しかねないため、題を「魯西亞人止白里併有来歴」などに変更すべきだ、という意味に取って間違いないだろう。

ここで別題「魯西亞志附録」に話を移すと、題名に含まれている「魯西亞志」とは、桂川家四代甫周（一七五一―一八〇九）が訳出した地誌書で、原典はヒューブナー『一般地理学』（*Allgemeine Geographie*）である。寛政五年（一七九三）に成立した本書の記述は、ロシアの自然的環境、境界、領土併有史、風俗、政治、産業、教育にわたっている。確かに「魯西亞志」に比べ、「阿羅祭亜来歴」はその一部を補足するような内容の小品であつたことは否めない。実際、玄沢跋文末尾には「桂氏嘗て譯文あり魯西亞志と名く宜併せ見るへし」（洲本本）とある⁽⁵¹⁾。

ただ、志筑忠雄が一八〇六年に没していることと、一八〇七年に書写された洲本本、ならびに一八一二年に筆写された早大本ともに「魯西亞志附録」という題が確認できないことを勘案すると、後世の別人がこの異題を付したと断定できる。ここにおいて、当該資料の原題を「阿羅祭亜来歴」と確定する。

おわりに

寛政七年（一七九五）、数え年三十六になった志筑忠雄は、『新旧東インド誌』の中のロシアが東方に進出した経過を描いたくだりを「阿羅祭亜来歴」と題して訳出した。その背景には、志筑の生きた舞台装置が近世日本における対外関係の最前線・長崎であつたことが所在す

るが、訳出の直接的な契機は、寛政四年（一七九二）にロシア使節ラクスマン（Adam Krilovich Laksman, 1766-?）が、漂流民の送還と通商関係の樹立を目的として根室に來航した事件と見て間違いない。侵略を意図したものではないにせよ、一七七〇年代初頭にベニョフスキー（Móric Benyovsky, 1746-1786）が警告したロシア南下の情報に虚言を多く含むものであったが、或る意味でここに〈現実〉となった。

ラクスマン來航の翌年に記された桂川圃周「魯西亞志」や前野良沢「魯西亞本紀略」といった著作と比べると、「阿羅祭亜來歴」がこれらの一部を補足するような小品でしかなかったことは否めないが、着目すべきは志筑にとって初めての政治・外交にまつわる訳述活動だった点で、それまで西洋の天文・物理学の訳出にその身を捧げてきた志筑の一大転機であった。かかる意味合いにおいて、志筑忠雄を理解する上で「阿羅祭亜來歴」は非常に重要な位置を占める著作と言える。

その後四十代を迎えた志筑忠雄は、二十年にわたって取り組んできた「曆象新書」（一八〇二成）の翻訳を完成させる一方で、「鎖国論」（一八〇一成）を訳出し、さらにはレザノフ來航を受けて、病床で「二国会盟録」（一八〇六成）を口述筆記し、同年鬼籍に入った。

ここまで見てきたように、「阿羅祭亜來歴」には、原文に存在するいくつかの固有名詞や、イエズス会にまつわる記述の翻訳を回避するなど、志筑が改変した形跡が認められるものの、基本的に原文を忠実に和訳したものであった。一方で「鎖国論」には、「阿羅祭亜來歴」では認められなかったような志筑自身の価値基準（西洋の植民地活動やキリスト教に対する反感・嫌悪）から発せられた改変や発言が織り込まれている。

すなわち、志筑は対外的な危機感を動機として三十六歳にして「阿羅祭亜來歴」を訳述したが、その危機感はいつしか志筑の心境を変化させ、学問的な憧憬の対象であった西洋は、その六年後、四十二歳にして「鎖国論」を訳出した時にはもはや憧憬のみにとどまらず、反感・嫌悪といった負の感情を抱く対象にまで変容していた。

注

(1) 『東洋学芸雑誌』第一号（一八八三年九月再版）「緒言」。旧字は常用漢字に改めた。以下、一次資料を除いた全ての引用文で同。

(2) 狩野亨吉「志筑忠雄の星気説」。

(3) 前後が切れているものの、大槻玄沢に宛てた志筑忠雄の書簡一通が確認でき、その交友が窺える。渡辺庫輔『阿蘭陀通詞志筑氏事略』（長崎学会、一九五七年）、四三頁。また、吉田忠「大槻玄沢、玄幹父子の西遊と志筑忠雄」（長崎史談会編『長崎談叢』第五九輯、長崎文献社、一九七六年所収）参照。

(4) 鳥井裕美子「志筑忠雄の生涯と業績——なぜ志筑忠雄なのか？」（『蘭学のフロンティア——志筑忠雄の世界』、長崎文献社、二〇〇七年所収）。拙著『鎖国』という言説——ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史——（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）、六八〜六九頁表3。片桐一男「志筑忠雄について」（『洋学史研究』第二六号、二〇〇九年）、二三〜二四頁表1を参照。また、片桐一男は新出資料「囁蘭病名解説」を紹介しているが、これは病名に係るオランダ語の語彙集であるため、志筑の業績としてはオランダ語学に分類してよいと考えられる。

(5) 大森實「志筑忠雄『曆象新書』の光学とその意義」（『法政大学教養部紀要』第二一号、一九七五年）、吉田忠「志筑忠雄の心遊術」（『日本思想史研究』第三六号、二〇〇四年）ほか多数。近年でも、任正琳「朝鮮科学史における近世——洪大容・カント・志筑忠雄の自然哲学的宇宙論」（『思文閣出

版、二〇一一年）第七章「志筑忠雄『混沌分判図説』の検討とその科学史的評価」といった論考が上梓されている。

- (6) 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』四（早稲田大学出版部、一九八一年）ほか多数。

- (7) 松田清「志筑忠雄における西洋文法カテゴリーの受容」（前掲『蘭学のフロンティア—志筑忠雄の世界』所収）ほか参照。

- (8) 吉田忠「志筑忠雄『万国管闡』について」（長崎史談会編『長崎談叢』第五輯、長崎文献社、一九七二年所収）。なお、本稿で掲げる資料については、写本および文書の場合は鍵括弧で、刊行物の場合は二重括弧で示した。

- (9) 第三章第三節で証明するように、「阿羅祭垂来歴」が写本の原題であると考えているため、この呼称で統一する。なお、資料名のルビは現代仮名遣いにて付した。

- (10) 志筑忠雄のいわゆる三部作がロシア事情を意識したものであることは、沼田次郎「志筑忠雄とその時代」（『歴史と人物』、吉川弘文館、一九六四年所収）などで指摘されている。

- (11) 前掲拙著『鎖国』という言説で、写本九四点の書誌的調査ならびにその系統分類を基軸としながら、近世後期・近代における「鎖国論」とその内容の受容相を究明した。

また、鳥井裕美子は現存する四点の「二国会盟録」写本を比較した上で、典拠や志筑訳文について論じている。「鎖国論」・「二国会盟録」に見る志筑忠雄の国際認識（前掲『蘭学のフロンティア—志筑忠雄の世界』所収）。楠木賢道は鳥井の仕事を踏まえ、内容分析、ならびに志筑忠雄注および安部龍平注の評価付けを行った。「二国会盟録」からみた志筑忠雄・安部龍平の清朝・北アジア理解—江戸時代知識人の New Qing History?—（『社会文化史学』第五二号、二〇〇九年）。

- (12) 後述第三章第二節で、志筑忠雄による跋文ではないと判断したものについては括弧で示した。

- (13) 例えば、写本を蔵していた鮎澤信太郎による解説（書名は「魯西亜志附録」とされている）にも、正確な訳出箇所に関する記述は見えない。『鎖国

時代日本人の海外知識—世界地理・西洋史に関する文献解題—」（原書房、一九七八年）、九四～九五頁。

- (14) 志筑の手沢本と見込まれる蘭書を多数収めていた平戸楽蔵堂文庫（蔵書目録）に「新田東インド誌」は認められない。松田清『洋学の書誌的研究』（臨川書店、一九九八年）参照。

- (15) 以下、初版を復刻した Van Wijnen（二〇〇二～二〇〇四年刊）版を底本として用いた。

- (16) 原文では一月六日にテオドルが没した旨が記されている。[...] Czaar Theodor den 6^{ten} Januarii stierf [...]. *Oud en nieuw Oost-Indiën*, vol. 1, p. 113. なお、「」内は筆者による加筆。以下、全ての引用文で同。

- (17) Czaaren van Moscovien, *Ivan en Pieter* [...]. *Oud en nieuw Oost-Indiën*, vol. 1, p. 113.

- (18) In 't jaar 1722, den 25^{sten} Februari [...]. *Oud en nieuw Oost-Indiën*, vol. 1, p. 114.

- (19) 原文は den grooten Czaar, Peter Alexewitz（大皇帝ピートル・アレクセエヴィチ）。*Oud en nieuw Oost-Indiën*, vol. 1, p. 114.

- (20) 原文では Nipsiou と記されている。Oud en nieuw Oost-Indiën, vol. 1, p. 114. 「阿羅祭垂来歴」では原文に基づいて「子ブチヨウ」と表記している。この Nipsiou は、ネルチンスクの中国語「尼布楚」（Nibuchū）に基づいていると考えられる。

- (21) 脱落文は indien deze Jezuiten 'er niet by geweest waren. (もしこれらイエズス会士たちがいなかったら)。Oud en nieuw Oost-Indiën, vol. 1, p. 114.

- (22) 早大本ではここをめぐり一行分の記述が脱落している。

- (23) *Oud en nieuw Oost-Indiën*, vol. 1, p. 114.

- (24) 「鎖国論」中に、西洋の植民地活動やキリスト教に対する志筑忠雄の反感が見られることについては、鳥井裕美子が詳細に論じている。「ケンペルから志筑へ—日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容—」（『季刊 日本思想史』第四七号、一九九六年所収）。前掲拙著『鎖国』という言説、八

八〇九一頁。

(25) 下線は筆者による。以下、全ての引用文で同。

(26) 原文は *schoone mater-vellen* (美しい貂の皮)。 *Oud en nieuw Oost-Indiën*, vol. 1, p. 113.

(27) 【】は割注内の記述を示す。以下、全ての引用文で同。

(28) 藤田覚『近世後期政治史と対外関係』(東京大学出版会、二〇〇五年)、一四―一五頁。眞壁仁『徳川後期の学問と政治 昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』(名古屋大学出版会、二〇〇七年)、一六〇―一七二頁。

(29) 原文は *Caspische zee* (カスピ海)。 *Oud en nieuw Oost-Indiën*, vol. 1, p. 115.

なお、「阿羅祭亜来歴」成立以前では、前野良沢『魯西亜本紀略』草稿(一七九三成)に、「北高海」という呼称が見える。『大分県先哲資料叢書 前野良沢』資料集第三巻、九一頁。

(30) その直後の箇所では「高海」、「北高海」と正しく記されている。

(31) ただし、「清康熙二十五年」については、「阿羅祭亜来歴」原本がもともと誤っていた可能性は否定できない。

(32) 原文は *prins Sosan, Oud en nieuw Oost-Indiën*, vol. 1, p. 114.

(33) 以下、国立公文書館蔵本とする。

(34) 前掲眞壁仁『徳川後期の学問と政治』、二五六―二五七頁。

(35) 「蘭学者」という概念(言説)には、「近代日本における近世像」をめぐる問題が所在すると考えているが、ここでは便宜上用いた。以下同。

(36) 例えば、東京大学附属図書館総合図書館南葵文庫蔵本には「(阿)羅祭亜来歴」は所収されていない。『大分県先哲資料叢書 前野良沢』資料集第三巻参照。なお、現存する「東砂葛記」のうち「(阿)羅祭亜来歴」を所収していることが確認できているのは、本稿で挙げた二点のみである。

(37) 原田博二「阿蘭陀通詞志筑家について」(前掲『蘭学のフロンティア—志筑忠雄の世界』所収)、二四―二五頁。

(38) イサベル・田中・ファン・ダーレン「オランダ史料から見た長崎通詞—志筑家を中心に—」(前掲『蘭学のフロンティア—志筑忠雄の世界』所収)、三三―三四頁。

(39) 現在通用しない異体字については現行のものに改めた。

(40) 洲本本より。

(41) 彌永貞三、山口静子、鈴木圭吾「大日本近世史料 編脩地志備用典籍解題 一」(『東京大学史料編纂所報』第七号、一九七二年所収)、四三頁。

(42) 『編脩地志備用典籍解題』六(東京大学出版会、一九七九年)、一一〇頁。

(43) 「凡例」『編脩地志備用典籍解題』一、東京大学出版会、一九七九年、六頁。

(44) 前掲眞壁仁『徳川後期の学問と政治 昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』、二九一頁。

(45) 前掲島井裕美子「ケンベルから志筑へ—日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容—」、一二七―一二八頁。

(46) 前掲松田清『洋学の書誌的研究』、五九八頁。

(47) *Drie aammerkekyke Reizen, Laaste Druk* (1746), p. 122. 松浦史料博物館蔵。

(48) *Drie aammerkekyke Reizen, Laaste Druk* (1746), p. 171. 松浦史料博物館蔵。

(49) 洲本本。

(50) 志筑と玄沢との交友は、吉田忠「大概玄沢、玄幹父子の西遊と志筑忠雄」(『長崎談叢』第五九輯、一九七六年所収)に詳しい。

(51) 玄沢は一月に訳出された「魯西亜志」を見てから、同年の一〇月に跋文を記したようだ。早稲田大学蔵「魯西亜志」の奥付には「寛政^{辛丑}孟春」とある。なお、干支が誤っており、正しくは「癸丑」である。

【付記】

本稿は科学研究費補助金基盤研究(C)(研究課題番号:二三五二〇一一三)の成果の一部である。